



C.M.D - case IV -

The second part

qedqed

※後編だけ読んでも楽しめる内容になっています。

悲鳴から数十分後、私うみっちは会場の一室にいる。

私は悲鳴を聞いて、すぐに現場に向かった。

悲鳴を上げたのは主催者メンバーのひとり、四橋だった。

そして、私の目に飛び込んできたのは、ナイフで刺された男性だった。

生死を確認するために近づく。既に死んでいた。

殺されていたのも主催者メンバーのひとり、御堂だった。

関係者しか入れない部屋で御堂は背中からナイフで一突きにして殺されていた。

自殺、事故は考えにくく、ほぼ間違いなく他殺であろうことは明白であった。

その傍らで四橋が口に手を当て立ち尽くしていた。

ナイフは抜かれていなかったのも、血はあまり飛び出していない。

よって、犯人は返り血を浴びていないであろうことが想像できた。

それが計画的な犯行を裏付けている気がした。ナイフなどあるわけもない部屋だし。

そして、すぐにイベント関係者が警察に連絡。

警察の現場検証の結果、私は容疑者のひとりとして、

この部屋に待機させられているのだ。

とは言っても、私だけが容疑者ではない。

容疑者は主催者メンバーである、谷町、四橋、中央、千日、堺筋、長堀、今里の7人と、

イベント参加者のうち、チームの司令塔の役割を担った私を含む10人の計17人だ。

何故このメンバーかという、まず防犯カメラや裏方スタッフからの証言から、

外部からの侵入者による犯行は不可能と判断されたことと、

ひとりになれ、尚且つ犯行を行う時間があったのが先に述べた17人だったからであった。

そこまでは説明され、一応は納得し、簡単な事情聴取も行われたが、その後は何の説明もないま

ま時間だけが経過していた。

そんなわけで、私はやまっち達と会うことはおろか、連絡を取ることも出来ないまま現在に至っている。

せめて少しでも話したいと思って、預けているスマホを返してもらえよう、

警察にお願いしたが慌ただしいためか、保留にされている。

イライラが募り出した時、部屋の扉が開き、先ほど会田太（あいたふとし）と名乗った警部と数人の刑事が入って来た。

後から聞いた話では、部下からは”アイタタ警部”と呼ばれているらしい。

私はその意味を身に染みて感じることになる。

「えー、皆さんお待たせしてしまい、申し訳ございません。」

会田警部はまず一言謝ったが、皆からは早く帰らせてほしい、連絡を取らせてほしいと不満が爆発した。

「分かっています。現場検証も済みまし、事情聴取行わせていただきましたので、一旦お帰りいただこうと思っております。」

皆、安堵の表情を浮かべたが、第一発見者の四橋が皆が気になっていたことを聞いた。

「犯人は分かったんですか？」

「いえ、まだ分かっておりません。皆さんの、特に主催者メンバーの方々のお話は大変参考になりましたが、まだまだ裏付けが必要な状況です。」

ここで谷町が不満を口にした。

「何か私たちの中の誰かが犯人って言い方に聞こえましたが？」

「いえ、そのようなことはありません。」

いやいや、それなら私たち参加者メンバーが犯人ってことになるやん！と心の中で叫んだのは私だけではないだろう。

「それよりも、皆さんに見ていただきたいものがあります。」

会田警部は一枚の紙を私たちに見せた。

「これは亡くなった御堂さん、本名は二階堂新之助さんですが、その二階堂さんが握りしめていたものなんです。どうやら刺されてから少しは息があったようで、最後の力を振り絞って机まで這っていき、その紙を掴んで絶命したようなんです。ですので、我々はそれがダイイングメッセージなのではないかと判断しました。」

何故、そのようなものを容疑者に見せるのか疑問だったが、内容を読んで理解した。

そこに書かれていたのはクイズだった。

内容はこうだ。

「私たち主催者メンバーの中でひとりだけイニシャルに仲間外れがいます。さて誰でしょう？」

ここで声を上げたのは千日だった。

「そういえば、二階堂さん言っていましたよ。優勝したチームへの最後の問題を考えているって。それに答えられたら更に賞品をプレゼントする予定だと。」

更に今里も続く。

「確かにそう言っていました。その最後の問題は自分だけで考えて出すんだって。だから、彼以外はどんなものが知らなかったはずです。まあ、余興程度だと言っていました。」

他の主催者メンバーもその通りだと頷いている。

「そうですか……。残りのメンバーの本名をお聞きしましたが、ひとりだけの仲間外れはいませんでしたので、皆さんなら分かるかな、とお聞きしたのですが……。」

会田警部は思ったよりも成果が得られず、残念そうだ。

ていうか、そんなものがあるなら私たち参加メンバーはシロやん！と多分、ここにいる皆が思っただろうなあ。

「主催者メンバーは参加者には本名を名乗っていなかったんですね？」

「はい。名乗る予定もありませんでした。」

会田警部の質問に千日が答えた。

「では、参加者の方々がこの問題の答えを分かるはずはありませんね・・・。」

いやいや、警部さん、何をトンチンカンなこと言ってるねん。

てか、そのダイイングメッセージをすぐに見せてくれてたら良かったのに！

「警部さん、私その答え分かりますよ。」

私はサラッとやった。

会田警部だけでなく、皆が私に注目した。

「でも、ちょっと卑怯な問題ですよ。ただの知識問題ですよ。」

「君、この答えが分かるのかね？」

会田警部は驚きながら私に尋ねる。

「はい。まず、主催者メンバーの本名が関係ないことを前提とします。」

「どうして？」

それぐらい分かってよ、と心の中で叫ぶ。

「何故なら御堂さんは私たち参加者に本名を名乗る予定がなかったからです。そうですね？」
私は主催者メンバーに同意を求める。皆、そうだと頷く。

「これはクイズなので、私たち参加者が知っていることでないと出題することはできないはず
です。」

「では、イニシャルというのは何の名前のイニシャルなんだね？」

「当然、コードネームの方です。コードネームなら私たち参加者は全員知っています。つまり、
クイズとして成立するわけです。よって、谷町、四橋、中央、千日、堺筋、長堀、今里のイニシ
ャルで考えるんです。」

「しかし、そうすると各イニシャルは谷町はT、四橋はY、中央はC、千日はS、堺筋はS、長堀
はN、今里はIだから、ひとりだけの仲間外れを見つけることはできないぞ。」

会田警部は私に疑心暗鬼の目を向ける。私は相手にしないで続ける。

「これはあくまでもクイズです。普通に考えても仕方ありません。」

ここで私はクイズの答えであり、おそらく犯人であろう人の前に立った。

「堺筋さん、クイズの答えは貴方です。」

堺筋は思いもしない告白に驚きを隠せないでいる。もちろん、他の者も。

「何故、私がクイズの答えになるの？私は仲間外れどころか、千日がいるからイニシャルのSはふ
たりいるのよ。仲間外れからは最も遠いはずよ。」

「先ほども言いましたが、普通に考えても仕方ありません。これはクイズなんです。警部さん、
部下の方でもいいですが、大阪市営地下鉄の路線図をネットで調べてみてください。」

会田警部は自らのスマホで調べている。

「出ましたか？では、駅番号を表す際に用いられる路線記号を御堂筋線から順に観ていってくだ
さい。」

「これが何だって言うんだ。御堂筋はもちろんMだし、谷町もT・・・当然、堺筋も・・・あっ！
」

「分かりましたか？他の路線は路線名の通りのイニシャルですが、堺筋線はKとなっています。こ
れは先に建設された千日前線にSが使われているためです。」

「なるほど・・・しかし、これは・・・。」

「はい。だから私は先ほど言ったんです。ちょっと卑怯な問題ですって。これって、ただの知識
問題ですよ。とにかく、イニシャルが仲間外れとは堺筋さん、貴方のことなんですよ。」

「だから、何だって言うの！こんなクイズの答えが私だからって犯人とは限らないでしょ！」
堺筋は必死に否定しているが、明らかに動揺している。

「もちろん、貴方の言う通りです。でも、最重要容疑者で浮上したことは間違いありません。被害者が最後に伝えようとした名前が貴方なのだから。」

私は冷たく言い放った。

「警察が調べれば、貴方と御堂さんとの関係を徹底的に調べればいろいろと出てくると思いますよ。動機も判明するだろうし、犯行現場からも何らかの痕跡も出てくるでしょう。日本の警察を舐めてはいけません。ねっ、警部さん？」

「えっ、・・・その通りです。」

会田警部は急に振られ慌てながら言った。

うみっちのお父さんなら信全面的に用できるが、この人はできそうにない。

堺筋は黙ったままだ。

私としても反論してほしかった。あんなものダイイングメッセージと言えないぐらいだ。

ただのクイズなんだ。犯人じゃなければ、いくらでも反論できる。

しかし、堺筋はしない。何か反論したいようだが、言葉にできないようで、口をパクパク動かしているだけだ。

私にはそれが自白のように思えた。

私たち他の者は私の推理披露後、すぐに自由の身となった。

結局、私が彼女を見たのはその時が最後だった。

後日、そらっちのお父さんから聞いた話では、その後の警察の捜査で彼女の犯行を裏付ける証拠も出てきたそうだ。

それを突きつけられて、彼女も観念したらしい。

動機は恋愛感情の綻れだそうだ。

何でもふたりは恋人同士だったらしいが、御堂が別の女性を好きになり、別れを切り出された末の凶行らしい。

結局、ミステリーナイトの方はうやむやの内に終了。

優勝チームも分からないまま。

めら先輩からは「うみっちの推理はパーフェクトだから優勝はうちらだよ！」とっていただいたけど。

みんなと合流した後、深夜のラーメンを食べに行った。事件の話に着に。

まあ、豪華な夕食は叶わなかったけど、十分に楽しめたかな。

さて、次の連休は和歌山までに幼馴染に会いに行く予定。

言語の天才と言われる彼女に。

彼女に会うと、あの夏の日を思い出す。バス停で出会った綺麗な女性が残した暗号にまつわる事

件を。